

ソウル日本文化センター



日韓市民交流の輪を広げた主催事業

造形美術分野では、グラフィックデザインのポスター展を近年、シリーズで開催しています。今年度は、資生堂の美人顔を作り続けてきた「中村誠ポスター展」を、9月にソウルで開催、約50点の作品展示のほか、映像資料を紹介すると共に、関連の講演会を実施しました。

舞台芸術分野では東京和太鼓コンテストで優勝を飾った女子中高生による「鬼島太鼓」を10月に招へい、蔚山・光州で合計6回の地方公演を通じて大勢の市民に感動を与えました。また、3月には在日コリアン3世・笑福亭銀瓶氏を招へいし、ソウル・光州・釜山で韓国語による落語公演を4回実施、祖国の言葉で日本文化を伝えたいという情熱が

若い人々を中心に熱く広がりました。

日本研究・知的交流分野では、JF出版協力プログラムによって助成され日本文化入門書としてマスコミ等から高い評価を得ている「日本文化の力」を執筆した著者たちによる連続講演会を同じく3月に開催し、ソウル日本文化センターのイオンホールは連日満員の盛況となりました。



ソウル日本文化センターのあるビル



鬼島太鼓の公演風景（蔚山）

Close Up



所長 小林 直人

真の日韓交流・相互理解の更なる増進を目的として、日韓文化交流5カ年計画の具体的・効果的事業実施のため、特に【次世代青少年】【地方】【情報】という3つの交流キーワードを掲げています。

まず次世代青少年交流に関しては日韓両国の若い世代が教育やメディアを通さない感動的で直接の触れあいを積み重ねることが最も重要です。これまで以上に対象年齢の若い参加者を重点化する努力を続けています。

次に地方交流では、全羅道地域アドバイザーや、釜山・済州両総領事館との緊密な連携を通じて、普段日本文化に直接触れることの少ない韓国の地方に紹介を助け、人的な交流を更に活発化させる考えです。

更に広報としての情報交流オフラインでは当センター図書館来館者にきめ細かくて親切な対応に努めるとともに、オンラインではメルマガの充実のほかHPを更新し日韓交流関係団体・機関の情報リンク、ウェブ相談・質問への対応など、双方向の交流を目指しています。

以上のほか、在韓日系企業韓国人社員5万名を超える Seoul Japan Club（日本人会）の一員として積極的な行事連携を通じ「開かれたセンター」としての知名度・認知度向上に努めていきたいと考えています。

北京日本文化センター



日中関係好転など、転機を迎えた

ジャパンファウンデーションの最重要国の拠点として、さらに機能と施設を充実させるため、北京市東部の中央ビジネス地区への移転を決定し、内装工事と移転準備作業を行いました（2007年5月に新事務所に移転）。

新事業として、中国高校生長期・中期招へいプログラムの実施（→23頁）、中国内陸部における日本文化の発信拠点『ふれあいの場』の第1号を四川省成都市に開設しました（→22頁）。

また、2007年3月には北京・上海・西安の3都市にて音楽グループ Rin' のコンサートツアーを開催し、いずれの



移転後リニューアルした図書館



Rin' 三都市コンサートツアー

都市でも中国の若者を中心に大変な盛り上がりを見せました。2005年度に立ち上げた在中国日本人留学生によるネットワーク「留華ネット」は着実に発展し、幅広い地域で日中学生の交流の輪が広がりました。

ジャカルタ日本文化センター



子どもから大人まで幅広い事業展開を実施

「HARAJUKU」をテーマにしたファッション・デザインの公募を行い優秀な作品の展示を行う展覧会「イケてるハラジク」展を開催し、若者を中心に多くの注目を集めました。また、日本国内のみならず海外でも活発に作品を発表している「青年団」（平田オリザ氏主宰）の東南アジアツアーの一環として、ジャカルタでも「東京ノート」を上演。その他ポスターや絵画の公募コンテスト、国際交流囲碁大会など、より多くの人たちが参加できるような活動のほか、地震の被害があった中部ジャワの子供たち向けの復興関連事業も実施しました。

日本語分野では、当国派遣の日本語教育専門家およびジュニア専門家と連携して、現地日本語教師の質の向上を目指し、各種教師向け研修会および勉強会を積極的に支援しています。また、6月にはシンガポール、タイ、マレーシアおよびフィリピンの日本語教育関係者を集め、バンドンにて東南アジア日本語サミットを開催し、各国における課題等情報交換を行いました。その他、日本語学習者の学習意欲向上のため、高校生・大学生向け（社会人を含む）の日本語弁論大会の



ジャカルタ日本文化センター



青年団「東京ノート」ジャカルタ公演

実施や一般日本語講座（中級・上級）を開講しています。

日本研究分野では、研究者間および研究機関間ネットワーク強化を目指した各種事業に取り組み、イスラム知識人の講演会を大学と協力して行ったほか、日本研究協会（ASJI）との共催で、防衛大学学長の五百旗頭氏を招いてのワンデーセミナーをジャカルタで実施しました。

バンコク日本文化センター



参加型の事業が大好評

日本語教師需要増加で研修の再開も

文化・芸術交流事業では、日タイ修好120周年の幕開けイベントとして、東京打撃団と焔太鼓による公演をバンコクのタイ文化センターで開催しました。また、小倉百人一首の歴史やかるた遊びを紹介する講演と、現役トップクラス2選手による競技かるたの実演、観客も参加してのかるたゲームや、古今の各種かるた札などの展示など、かるたのレクチャーデモンストレーションを行い、好評を博しました。

日本語事業では、タイの高校における日本語教師の需要増を受けて、日本語教師になる意思のある現職の高校教師を対象とする、日本語と日本語教授法の10カ月の長期研修を、タイ教育省との共同事業として再開しました。

日本研究・知的交流事業では、タイの国際交流基金元フェローらによる、日本の地域コミュニティー（高知県馬路村）の発展を紹介し、タイへの応用の可能性を考えるセミナーを開催しました。



バンコク日本文化センター



和太鼓タイ公演 提供：焔太鼓

マニラ事務所



日比友好年事業を実施

2006年は日比友好年と銘打ち、両国の国交回復50周年を記念して1年間にわたってさまざまな事業が全国的に実施されました。

ポップカルチャーの分野では、人気のコンテンポラリーダンス・グループ、コンドルズの公演を実施し、1,500名収容のフィリピン文化センター大劇場が超満員になりました。また今年度は特に舞台芸術における日比共同制作に力を入れました。伝統芸能の分野では、観世流シテ方の指導によるフィリピン人大学生で構成される能楽アンサンブル公演を実施。現代

演劇では、鄭義信氏演出によるホラー・コメディ・ミュージカルを制作し、いずれも大好評でした。

さらにフィリピンは約7,000もの島々から成る国ですが、マニラ首都圏のみならず北ルソン、中部ビサヤや南部ミンダナオ各地方で、全国的な事業展開を図りました。全国48カ所にて実施した前述の能公演は、1万2千名の観客を得たほか、「日本の世界遺産写真展」は全国16会場で実施し、来場者数は2万4千名にも上りました。



マニラ事務所



友好の日(7月24日)記念能公演
©Joseph G. Uy Jr.

ニューデリー日本文化センター



充実した施設に模様替え インド全域で日本語教育をサポート

2006年9月に、小ギャラリー・多目的ホール・図書館・日本語教室を備えたニューデリー日本文化センターへ模様替えしました。12月4日にはその開所式が行われ、総勢250名の招待客が、茂山千三郎師の大蔵流能狂言公演を堪能しました。

2007年は日印交流年です。1月のインド・イラン・ウズベキスタン・日本合同演劇「演じる女たち」初演を皮切りに、2月には日印交流年オープニング行事として、チェンナイ・プネ・デリーの各都市において、大江戸助六太鼓による和太鼓公演を開催し、デリーでは延べ1,300名の観客が集まりました。3月には観世宗家による能を上演、1,500名のデリー市民が詰めかけ、質の高い日本の伝統芸能を鑑賞しました。

2006年度からは中等教育課程に日本語科目が導入され、ニューデリー日本文化センターはカリキュラムおよびテキスト制作についての支援を行っています。また、日本語教師が不足している現状を打開するため、インドに配置された3名の日本語教育アドバイザーが、インド全域で日本語教育をサポートしています。

このほか、客員教授派遣プログラムにより、デリー大学に池内輝雄国学院大学教授を派遣し、村上春樹や吉本ばななをはじめとする現代日本文学について講義。ネルー大学、バンガロール大学でも出張講演会を行い、好評を博しました。



ニューデリー日本文化センター



大江戸助六太鼓、デリー公演

クアラルンプール日本文化センター



充実した自主企画公演 地方都市での事業展開も積極的に実施

これまでマレーシアではほとんど紹介される機会のなかった日本の現代演劇を紹介するため「青年団」「KUDAN Project」を招へいしたほか、美術、衣装の専門家を招いて舞台技術ワークショップを開催しました。また、

マレーシアでは初めてとなる「山海塾」の公演は大きな反響を呼びました。1月には「日マ友好年2007」のオープニング事業として和太鼓公演を実施。また、首都圏以外での事業展開にも力を入れ、古武道デモ、映画上映会、田中明彦東京大学教授による日本研究講演会などを地方都市で開催しました。

日本語教育の分野では、教育省が行う中等教育用のシラバス・教科書の作成、教員養成事業に協力しています。また日本語教師対象のセミナーや、中上級向けの日本語講座を引き続き実施しました。



KUDAN Project 公演
「真夜中の弥次さん喜多さん」



センター内 TATAMI ROOM でのお茶会

シドニー日本文化センター

2006 年日豪交流年を記念して、さまざまな事業を展開
等身大の日本文化を伝える数々の事業

文化芸術分野では、津軽三味線の公演『Tsugaru: Soul & Beat of Japan』を国内3都市で開催。美術展『Rapt!』では、展示とシンポジウムで現代日本を紹介するなど、実験的な試みを行いました。「日本映画祭」では、シドニーで19本の日本映画を上映、5,000名を超える観客を集めました。日本研究・知的交流分野では、日豪の国際協力の可能性を探る『日豪フォーラム』開催や、若手研究者のための学術ジャーナル『New Voices』を創刊しました。

主要事業の紹介

①ワンダーバス・ジャパン 2006

日ごろ日本文化に接する機会の少ない地方都市の子どもたちと直接交流することを目的とした『ワンダーバス・ジャパン』は、2006年5月にクイーンズランド州を2週間にわたって巡回しました。ボランティアのクルーによって企画された和太鼓、踊り、折り紙、書道、茶道などのワークショップやクイズ大会などは、開催地の自治体や学校関係者の協力を得て、合計約9,000名が参加しました。

②日本映画祭

2006年で10回目を迎えた『日本映画祭』。シドニーでは日豪交流年を記念して、『Always—3丁目の夕日』など19本の日本映画を上映しました。会期中の入場者数は5,000名を超える人気、そのうちオーストラリア人が8割を占め、映画を通じた日本紹介に大きな手ごたえを感じました。

③日豪フォーラム

知的交流の分野では、アジア太平洋地域における日本とオーストラリアの国際協力の可能性を探るフォーラムをマコーリー大学と共催。安全保障や人道援助、などの分野について討議が行われ、日豪双方から招かれたスピーカーと聴衆の間で活発な議論が行わ

れました。日本会場（早稲田大学）との間をインターネット回線で中継。毎回ほぼ会場は満席となり、4回を通じて約1,000名の参加を得ました。



ワンダーバス・ジャパンのクルー



オフィスのあるチフリープラザビル

Close Up



所長 上野 吉之

日豪交流年という記念すべき年を、オーストラリアで経験することができ、大変誇りに思っています。1年を通じて、多くの分野で記念行事が行われ、その数は日本とオーストラリア両国あわせて約1,000件にも上りました。

和太鼓や津軽三味線などの音楽公演、日本の現代を伝えた現代美術展「Rapt!」、日豪両国の国際協力の可能

性を検討した学術フォーラムなど、できるだけ幅広く日本を紹介することに努め、たしかな手ごたえを感じました。

日本とオーストラリアは、アジア太平洋で最も成功したパートナーシップだと言われています。多文化主義を掲げて多くの移民が住むオーストラリアでは、たくさんの国・民族の文化が共存しています。このパートナーから、学ぶべき点もたくさんあると思います。

私たちの事業をサポートし、参加してくださった皆さんに、改めて心から感謝いたします。そして、これをきっかけとして日豪の文化交流がさらに発展していくことを祈念します。